

# いまなぜ関係性を通した 発達支援なのか

## 最近の体験から

筆者のもとに紹介されて受診した九歳（小学三年）の男児（A男）である。

小学一年の時、集団場面でのぎこちない振る舞いと、ときおり衝動的に奇異な行動をとるということで学校から精神科で診てもらおうように勧められ、あるクリニックを受診した。そこでアスペルガー障害との診断を受け、両親は大きなショックを受けた。

初めて聞く診断名を告げられたことだけでも不安は大きかったが、両親が医師にアスペルガー障害とはどんな病気かと尋ねたところ、そこにある本を読んでくださいと言いつつ、そこにある説明も助言もしてもらえなかったことが、さらに両親の不安に追い打ちをかけたらしい。それからの数年間、学校でA

男はアスペルガー障害だという目で見られるようになり、両親はどうすればよいのか、途方に暮れながら生活してきたという。

筆者はまずA男に会ったが、最初に顔を合わせた時の印象がとて強く目に焼きついた。過度に従順で礼儀正しく、ことばの一言一句に気を使いながらこちらの質問に答えている。誰と来たのかと尋ねると、「○○と来た」と間髪入れずに応えたが、自分の言い方にすぐに気づいて、「○○と来ました」と言い直す。緊張がとて高いのだろう、ソファに座っているが、身体のうちぎこちなく、終始表情も硬い。こちらに過度に気を使うためか、質問の意味を受け止めて考えてから語るというよりも、とにかく話さなければという、何かに追い立てられるような心理状態にあることが推測された。

その後、両親との面接で、母親もA男と同

様に、過剰適応と思えるほどにこちらの働きかけに同調して応じていた。いつも周囲に神経をつかって疲れ果て、抑うつ状態にあることが明らかになった。

つぎは、ある保育園の園長から相談を受けた四歳男児（B男）である。

集団場面で落ち着きがなく、一人勝手に外で遊んだり、突然脈絡のないことを言ったり、他児を叩いたりするという。MIU (Mother Infant Unit・母子ユニット)<sup>(1)</sup>での観察からB男には関係欲求をめぐるアンビバレンスが強く、母親との関係も悪循環が進み、B男は頻繁に「挑発行動」を取っていた。<sup>(3)</sup>

園長の強い勧めに比べて、母親はあまり問題意識をもっていないようで、気になる子どもの行動特徴を淡々と筆者に話すのであった。親の立場というよりもまるで専門家的な

立場からの説明であるような印象さえ抱かせるほどであった。

B男には両手の羽ばたき運動を繰り返すという気になる行動もあったが、数回セッションを重ねる中で、その羽ばたき運動がどのような文脈で出現するかを推測させる場面に遭遇した。

初回に比べると、B男はずいぶんのびのびと動き回るようになっていた。中央に置かれたビニール製の消防自動車の形をした大きなボールテント（中にたくさんのビニールボールを入れている）に入って遊びたいのか、母親に何度も入るように誘い始めた。B男と一緒に入るにはちよつと手狭で、母親はしばし躊躇していた。それでもB男は執拗に要求するので、母親はためらいつつも、しばらくしてテントの中に入っていった。B男は消防自動車を運転しながら遊園地に行こうとしていた。まもなく遊園地に着いたらしく、B男は母親に向かって「遊園地行こうよ！」と何度も声を張り上げていた。母親は「行こうね」と口では言うが、億劫なのか、なかなか車から出ようとはしなかった。するとB男は苛立ちを示すようにして、両手で羽ばたくような常同反復行動を見せ始めた。

B男の要求にはすぐに応じるのが億劫そうな母親であったが、まもなく母親のほうから「お母さん、出てもいい？」とB男に尋ねた

のである。するとB男は「うん」とすぐに返事をした。そうやってやつと母親はボールテントの中から出てきた。しかし、母親はB男の遊びと一緒に興じようとする様子もない。何回かB男は「行こうよ！」と弱々しい声で独り言のようにつぶやいていた。その時であった。母親はB男に真顔で「今度、日曜日、お父さんと行こうね」と応えていたのである。

### 行動次元で子どもを見ること

これら二つの事例を並べて取り上げたのは、そこに昨今の発達障害に対する理解における共通の問題があるのではないかと思われるからである。

前者の事例を取り上げたのは、診察した医師の対応がいかに冷たいかを非難したかったからではない。今日、精神科医が発達障害の診断をする際には、診断基準に則った行動特徴と子どもの行動をマッチングする作業を行っている。おそらくこの医師もそのような次元の診断を行ったのであろう。しかし、単なるラベリングで終わり、子どもの心は見えていないのである。

後者の事例でもけっして冷静な母親の接し方のみを取り上げて問題視したかったのではない。B男が遊びの中でどのような心の世界を描き出そうとしているのか、彼の心に寄り

添うことが、この時の母親にはなぜか難しかったのである。それよりも筆者が気になったのは、自分の要求に母親が動いてくれない。しかし、その苛立たしさを直接口に出して表現することができず、羽ばたき運動を繰り返している。それにもかかわらず、子どもを自分のペースで動かそうとした母親の誘いには驚くほど従順にに応じているのである。

さらに、B男の「いま、ここで」思い描く世界での遊びに対して、母親は共有化することが困難であるだけでなく、B男の誘いの言葉の字面に応じて「今度、日曜日、お父さんと行こうね」と応えている。両者の間に生まれた深刻なコミュニケーションのずれを見て取る必要がある。

このようなコミュニケーションのずれが生まれた遠因として、精神科医が発達障害について家族に説明する際に、行動特徴をいろいろと取り上げ、それが発達障害のどのタイプに該当するか、といった次元で説明しがちであることも関係しているのではないか。そのことが、今や親たちの子どもに対する見方に強く反映しているのではないかということに危惧されたのである。

### 客観的な診断基準が現場にもたらしたもの

今日の精神医学の領域では、多様な精神の

障碍、あるいは精神発達の障碍を捉える際に、国際的に共通の物差しが必要であることから、国際的診断基準が導入され、わが国の現場にも幅広く行き渡っている。精神障碍の大半は原因不明であることから、仮説的な原因に基づく診断名は極力排除し、国際的な共通の物差しとしての客観性を重視するため、その指標として行動特徴が列挙されている。

そのこと自体は妥協の産物として致し方ないことかもしれないが、問題となるのは、このような国際診断基準が広まることにより、発達障碍とされる子どもたち（人々）をわれわれが捉える際に、この診断基準に則った考え方に強く縛られ、客観的な行動特徴を通して理解することが重要であるとする流れが強まってしまっていることである。このような傾向は、医療現場のみならず、保育、教育、福祉のあらゆる分野にまで及んでいるのが実情である。

ここで立ち止まって考えてみたいのは、彼らを行動次元で捉えるという視点が、彼らとわれわれとの関係の質に及ぼす影響である。

### 行動の背後にある心の動き

ある人がうろろうと動き回っているのを見かけたでしょう。そんな姿を見ると、われわれ

れは何か落ち着かないことでもあったのかな、心配なことでもあったのかな、不安そうだな、などとその人の気持ちをそれとなく感じ取る。このように、われわれはある人の行動を目にした際に、単に客観的な立場から「あの人が動き回っている」とだけ捉えているわけではない。動きを観察していると同時に、その人のどこかいらいらして落ち着かない心の動き（力動感 *vitality affects*）をも感じ取っている。

このようにわれわれは、そのとき実際にはその人と同じように動き回っていないまでも、他者の動き回っているときの身体の動きを、みずからの身体を通して感じ取っている。そして、そのような身体の動きを通して、同時に他者のそのような動きの背後に働いている気持ちの動き（情動）をも感じ取ることができるのである。というよりも、その人の気持ちの動きがうろろうと動き回るといふ行動として表に現れているというように考えている。

われわれ人間には本能的に（本能的に）、互いの身体と身体が共振すると同時に、その時の気持ちも同時に共鳴するような能力が備わっている。このことは間身体性、間情動性、間主観性などと称されている問題として、最近ではよく知られるようになっていく。よって、われわれは他者のなんらかの行

動を目の当たりにした際に、単に客観的に冷めた目で行動のみを観察しているのではなく、同時に、暗黙のうちに、身体を通して他者の行動とともに醸し出している力動感がみずからの身体に通底してくるものなのである。

このことは、話しことばを理解する場合を考えたら、よりいっそうわかりやすい。他者の話を聞く際に、われわれはけっしてその人の話の内容をことばの字面の意味だけで理解しているわけではない。話し手の気持ちの動きが、声の調子などに反映され、それが話しことばとともにわれわれの身体（情動）に共鳴する。それをわれわれは暗黙のうちに感じ取りながら、他者の話しことばを理解しているというのが実態であろう。ある人の話を聞いていて「あの人の話し方はどこかどげどげしい」などと感じたりするのはその好例である。実際のコミュニケーション体験を考えてみると、行動のみの観察的立場がいかに実態そのものから大きくかけ離れたものであるかがわかる。

しかし、これまでの学問の世界では、なぜか本来感じ取ることができるはずの身体の動きと気持ち（情動）の動きには極力触れることなく、客観的で行動観察的な立場から、行動のみを記述する立場に徹してきた。たしかに、「健全な人」や「定型発達の子ども」と

比較して、一般的には理解困難な行動を示すことの多い発達障害の人々では、行動の背後に動いている気持ちを感じ取ることが容易ではないことはわからないでもない。しかし、理解は容易ではないとはいえず、やはり発達障害の人々においても、彼らのなんらかの気持ちの動きが行動となって表に現れていると考えるのが理にかなっている。

学問の世界に身を置く者たちが、なぜ行動観察の態度に徹し、その行動の背後に動いている気持ちにまで踏み込まないかといえば、近代科学の三つの柱とされる「客観主義」「普遍主義」「論理主義」に忠実であろうとするからである。

しかし、現場で実際に発達障害の人々に対して対人援助の実践を行っている人々にとつて、彼らを理解し援助を実践しようとするうえで、このような客観的立場からの接近のみで、果たして彼らへの望ましい援助が可能なのであるか。

### かかわることによって 見えてくる行動の意味

MIUの臨床を実践していると、たとえば、それまで単に「こだわり行動」という負の(病理的)行動にしか見えなかったものが、次第に彼らのある心の動きを示す行動であることがわかってくることは少なくない。

MIUに導入した初期の段階では、母子もわれわれも互いにぎこちない動きが目立ち、ことなく緊張した雰囲気を感じさせる。どのようにかかわったらいかが困惑している親たちは、懸命になってなんとか子どもに働きかけようとする。

そのような初期の段階では、きまつて子どもたちはMIUの室内にあった玩具をどれか手にとり、ずっと大切そうに持ちながら動き回ったり、そうかと思うと一つの遊びにひとり没頭していることが多い。そのような子どもたちにつき合っているわれわれも、母親と同じように、どのようにかかわったらいかが、戸惑いながらぎこちなくその場にたたずんでいる。そのようなときには、親もわれわれも余裕がないため、子どもの気持ちにまで思いは至らず、ただ戸惑い、子どもに対してなんとかしなければという焦燥感に圧倒されていることも少なくない。

しかし、援助が功を奏して親もわれわれもぎこちなさが薄らいでくると、子どもたちもこのびのびと動き回るようになる。そうなると、当初の「こだわり行動」はいつの間にか消えてしまっているものである。このような経過を通して、初めて気づくことも少なくないが、初期の子どもたちに見られた「こだわり行動」が、実は彼らなりになんとか今の自分の気持ちを落ち着かせようとする「もが

き」の行動であることがわかる。

このように「行動」のもつ意味は、すべて直接かかわるわれわれとの間に浮かび上がってくる。両者の関係が熟していくにつれて、その意味はより鮮明になってくるのである。

### 行動を観察するのか、 気持ちを感じ取るのか

対人援助の仕事に身を置いているわれわれが、発達障害の人々の不可解な行動を目の当たりにしたとき、どのようにかかわっていくかといえば、それには大きく分けてふたつのあり方がある。一つは、われわれからみて好ましくない(負の、病理的)行動がなんとか好ましい(正の、通常の)行動に変わるように援助の方策を考えようとする立場である。もう一つは、なぜそのような行動を取ったのか、彼らの気持ちを理解することによって、援助の方策を考えようとする立場である。

行動の背後に動いている気持ちの動きを取り上げることは、主観の世界のことだから科学的ではないとして、禁欲的にその世界には触れることなく、行動だけに主眼を置いてかかわろうとする立場の人々は、必然的に前者の立場からの援助のあり方を模索することになる。このような援助であれば、どうしても彼らの行動を変えていこうとする働きかけになつてしまう。本来、人間はある気持ちが助

いて、その結果なんらかの行動（話しことば、身振りなど）を起こしているのであるから、気持ち先であつて、けつして行動そのものが先にあるのではない。

このことは、発達障碍とされる人々の場合でも当然同じである。そうであるにもかかわらず、われわれは彼らの気持ちを感じ取るように努めることなく、行動観察的立場に徹し、行動変容を目指すとなると、そこにはどのような関係が生まれることになるのか。自分の気持ちがあつてもうえなないための葛藤が高じるとともに、自分が他者によつて動かされる、ときには自分が何かの力によつて操られるという感覚さえ生まれてくるのではないかと懸念されるのである。<sup>(2)</sup>

### 関係性を通じた支援に よつて見えてくるもの

以上述べてきたような根拠に基づき、われわれは常に子どもたちの気持ち（情動）の動きに焦点を当てた支援を志向している。その際、彼らの気持ちの動きを感じ取るのはわれわれ自身のものである。われわれがこうした実践を「関係発達支援」と称しているのは、まさにそのためである。<sup>(3)</sup>

関係発達支援において、最大のポイントとなるのは、子どもと養育者のあいだに生まれた悪循環（関係障碍）を断ち切ることにある

が、この悪循環を生み出しているのは、子どもとの関係欲求をめぐるアンバランスと、それと結びついて現れる養育者の側の子どもにかかわるのが難しいという思いである。それゆえ、このアンバランスを緩和するように働きかけることと、養育者の側の子どもに対する負の感情や負のかかわりをいかに減らし、ていくかということに焦点を当てる必要がある。

このような対応が功を奏すると、多くの場合、子どもとの関係欲求が前面に現れやすくなり、その結果、子どもの動きを掴みやすくなり、養育者もゆとりをもつて子どもの気持ちに沿った対応が少しずつ可能になっていくものである。

すると、養育者も子どもの気持ちを受け止めることが比較的容易になり、当初のかかわりが難しいという感じが薄れ、好循環が生まれていく。このような好ましい関係が生まれて初めて、子ども本来の発達の道が切り開かれていく。

こうした関係の変容を通して子ども側にも起こつてくるさまざまな事象を丁寧に扱い取ることを通して、子ども本来の発達の構造も明らかになっていくことが期待される。<sup>(4)</sup>

発達障碍のみならず子どもに対する発達支援の本来の姿は、このような地道な作業の積み重ねの中から次第に明らかになってくるの

ではないかと思う。

#### 〔文献〕

- (1) 小林隆児「自閉症の関係障害臨床―母と子のあいだを治療する」ミネルヴァ書房、二〇〇〇年
- (2) 小林隆児「主体性をはぐくむことの困難さと大切さ―幼児期と青年期をつなぐもの」『そだちの科学』五号、三五―四一頁、二〇〇五年
- (3) 小林隆児「ブックガイド『RDI』対人関係発達指導法」―対人関係のバズルを解く発達支援プログラム―『そだちの科学』七号、一四一―一四二頁、二〇〇六年
- (4) 小林隆児、井上玲子、稲岡勲「高機能広汎性発達障碍のリスクをもつ一歳男児に現れた原初的身振りの意味の検討」『児童青年精神医学とその近接領域』（印刷中）
- (5) 小林隆児、大久保久美代「関係性を通して進める発達障碍児の理解」『臨床心理学』（印刷中）

(2) ばやし・りゅうじ／児童精神科医  
(3) おおくは・くみよ／心理相談員